

# 近松門左衛門「釈迦如来誕生会」におけるシビ王本生譚

君野隆久

一、

近松門左衛門「釈迦如来誕生会」は、正徳四（七一四）年に竹本座で初演されたと推定される浄瑠璃作品である。正本は大坂の山本九兵衛・九右衛門の版による<sup>(1)</sup>。

「釈迦如来誕生会」は天竺を舞台として、釈尊の受胎から入滅までを扱った、まぎれもない仏伝文学である。しかしその内容は釈迦八相を中心とする伝統的な仏伝とは大幅に異なっており、親子の恩愛と勧善懲悪とを多くの登場人物によって巧みに表現する独自の物語世界を展開している。以下、『近松全集』第八巻に載せられた内山美樹子による「梗概」に大幅に依りながら、第一部・第二部のあらすじと、第三部の内容を——特に第三部の後半は引用をまじえつつ——次に紹介したい<sup>(2)</sup>。

二、

（第二）

五天竺の君と仰がれる摩訶陀国・淨飯大王の一の後、二の後は憍曇弥と摩耶夫人の姉妹であった。淨飯大王はそれまで世継ぎがなかったが、ある夜、摩耶夫人が「白象が胎内に入る」瑞夢をみたのち懐胎し、周囲は喜びにつつまれる。

ところが皇太后宮との官旨が下った摩耶夫人に対して姉の憍曇弥は嫉妬と悪心を抱き、右の司・婆將軍と謀り、太子誕生前に迦毘羅国・斛飯王の王子である提婆達多を大王の養子とし、摩訶陀国の世継ぎと定めるよう画策する。この計画は左の司・烏陀夷の妻の吉祥女に妨げられる。

烏陀夷と吉祥女には一人息子の槃特がいたが、槃特は生来の愚鈍であった。烏陀夷はわが子の知恵を祈りに、鶏足山の帝釈天の窟に日参していた。ある日参のおり、提婆達多より憍曇弥への密書を入手する。摩耶夫人を調伏しようと

いうたくらみを知った烏陀夷は、わが子を打ち捨てて調伏の現場の健陀羅山へ馳せ行くとする。そのとき大鷲二羽が舞い降り、槃特をつかみ、烏陀夷に傷をおわせて飛び去る。烏陀夷は馬を引いてきた車匿童子に、国王の大事と言いつけ、馬を借りて健陀羅山へ急ぐ。

四月八日、摩耶夫人は無憂樹の花を折ろうとした瞬間、右脇がひらいて太子が降誕した。降誕と同時に摩耶夫人はこと切れてしまう。誕生した太子は「天上天下唯我独尊」と唱え、二竜王が舞い降り、産湯を注いだ。憍曇弥と婆將軍は親殺しの理由で太子を殺そうとするが、烏陀夷が調伏の願書を突きつけて悪人どもを追い払う。

（第二）

十九年が経った。誕生した太子は悉達太子と名づけられ、成長するに従って諸々の技芸に秀でた才能を示した。五天竺一の美人と言われた耶輸陀羅女を后として不自由な生活を送っているが、心中ひそかに無常を観じている。悉達太子は耶輸陀羅に、愛欲におぼれるばかりが夫婦ではない、と諭して常の夫婦の交わりをしなかったが、あるとき共に花々に飛び交う蝶々を眺めるうちに、つがいの蝶々が袖に飛び入り、耶輸陀羅女は懐胎した。太子は出離の時が来たつたと観じて王宮を忍び出る。耶輸陀羅女と烏陀夷の妻・吉祥女はその後を追うが、途中で婆將軍の手下たちが、提婆達多が思いを寄せる耶輸陀羅女を奪おうと切りかかる。吉祥女は身を盾にして耶輸陀羅女を守り、逃げさせる。

提婆達多は悉達太子を滅ぼそうと計略をめぐらすうち、欲界の外道どもがあらわれ、提婆達多が前生で欲天の摩醯首羅王であったことを思い出させ、王位や色香に執着している暇に悉達太子が成道したら、魔境の滅亡も目前であることを警告する。提婆達多は仏法を滅却し、四天下を魔界となさんと思い立ち、耶輸陀羅女をも殺そうとするが、烏陀夷がその危急を救う。

（第三）

王宮を出た悉達太子は、檀特山へと赴き、そこまでくつわを取ってきた車匿童子とも別れ、法の師を求めている。

太子の後を追う耶輸陀羅女と烏陀夷は、提婆達多の追求を逃れるため道を変え、「こうふ」の里の貧しい一軒家に宿を求めた。その家の主・林丹子が自分の子らしい愚鈍な若い男に読み書きを教えようと苦勞する姿をみて、烏陀夷はかつて驚にさらわれて失踪したわが子の槃特を思い出す。そして見れば見るほ

どかつてわが子であつた槃特にちがいないと心中に思う。一方、林丹子は客が提婆達多の求めている相手と知り、ほうびの金ほしさに耶輪陀羅女を提婆達多にひきわたそうという出来心を起こす。烏陀夷もそのたくらみに気づきつつ警戒をしているところ、たまたまどこからか山鳩が飛んできて窓から家に入り、飛び回る。その鳩を愚鈍の若い男は箒で打ち落とし、殺してしまう。殺生をした息子を折檻しようとする林丹子を烏陀夷はとめて、わが子を無慈悲のゆえに打擲しようとしながら、一方で私たちを提婆達多側に引き渡そうとするのはいかなるものか、それは無慈悲ではないかと難すると、林丹子は涙にくれて告白をはじめ。

林丹子の言葉には、代々の獵師のゆえ殺生の報いに実子は育たず、十九年前、鶏足山で鷲に引き裂かれようとしていた少年・槃特をわが子として養い、愚鈍にもかかわらず愛育してきたという。槃特の息災延命を祈って殺生の業を断ち、貧苦に耐えてきたが、槃特の行く末を思うあまりに欲心を起こしたと烏陀夷に泣いて懺悔した。さてはそういう次第だったかと烏陀夷が心中に納得したとき、とつぜん狩装束を身につけた武士が数十人、どつと乱入してきて、さきほどの家に迷いこんだ鳩を出せという。林丹子が鳩の死骸を投げ出すと、武士たちの中の「ぐんばら」という者が怒って、「われわれは提婆達多の身内のものである。あれは摩醯首羅天の祭りに供える千羽の鳥のうちの最後の一只であつた。鳩を殺した者を出せ」と言う。林丹子はわが子の愚鈍を訴えて許しを請うが、「ぐんばら」は許さず、鳩を殺した槃特を代りに殺すと言い張る。林丹子の妻は手を合わせて命乞いをする。

「ぐんばら」「ハテやかましいいつ迄いふてかなはぬこと。さし殺さん」とよる所をうだいをしへだて「烏陀夷」「我らはあるじのがれぬ者。鳩も人も命は同じ命なれ共。からだの大小ばつぐんのさうい。鳩を秤にかけたらば二百目も有べきが。あの者はやせたれど十四五貫目算用なしには渡されず。秤目きつとさし引し。不足は御へんのふとも、でも胴でも切て釣を取ががつてんか。いかにいかに」とりくつづめ。林丹ふうふも力を得。「林丹子夫婦」「サアつりを出せつりを出せ約束きつとかためよ」とねだれかへしてつめかくる。ぐんばらほうどつまりしが「ぐんばら」「いやいや。さし引きもむつかし、此鳩をかけてみて。しやつが身のにく切そいで秤目

に合せ請とらん。それぞれ秤」との、しれば。さすがのうだいも理につまり。林丹ふうふはわつと計きえ入きえ入泣ゐたり。いかゞしてか下人共したんの大秤取出し。鳩をつ取て目をためす秤のさほは一尺五寸。人は五尺の身の命生死二つの中緒にかけて。各立よりためつすがめつ「各々」「まだかるいかるい。サアいか程有ぞ二百十錢三分五りん」とぞの、めきける<sup>(3)</sup>。

烏陀夷は智臣らしく、命は同じであつても、鳩の代わりであるならば、体の大小の相違が無視できない、体重の差の「釣り」はおまえの体で払ってもらおうか、と「理屈詰め」で「ぐんばら」に迫った。対して「ぐんばら」はそれならば「秤」で鳩を計量し、それと同じ重さだけの量の肉を削ごう、と言い出し、鳩の重さを計る場面である。槃特を救おうとした烏陀夷の反論は妙な方向へ進んでしまった。烏陀夷もこれには反論できない。

林丹涙をしのごひ。「林丹子」「よしよし親子は同じ肉身某がふとも、切りさいて渡さん」と庖丁をつ取も、をしまくれば。うだいをさへて「烏陀夷」「しばらくしばらく。血をわけし親子こそ同じ肉身なるべきに。もとは他人の身を切りさかせあの子が行末じしんかへつてあた成べし。こ、は我に任されよ」とはんどくを引よせ。かほつれつれと打ながめ。しばし涙にくれけるが<sup>(4)</sup>。

林丹子が槃特の身代わりになって自分の太股の肉を切り割いて渡そうとしたところ、(槃特は本当は自分の血を分けた子供であることを知っている) 烏陀夷はそれを押しとどめ、「槃特はあなたにとつてはもともと他人のはず。それなのに身代わりとなつては、その慈悲心がかえつて仇となるでしょう。ここは私にお任せあれ」と槃特を引き寄せる。

烏陀夷は実のわが子の顔をつくづくと見守り(一方の槃特は烏陀夷が生みの父だと知るよしもない)、育ての親の親の太股の肉を割く痛みをがまんせよと教える。槃特はおとなしく股を差し出す。烏陀夷は「でかした」とほめて、心を鬼にして抜いた剣で槃特の足を引き寄せて五、六寸の肉を削ぎ、「ぐんばら」の方へさあ受取れ、と投げ出す。槃特は痛い痛いとうめき、林丹子夫婦

に抱き寄せられる。

しかし切り出された肉は秤に載せてみると鳩の重さに足りない。「ぐんばら」どもはもつと肉を切つて渡せとわめく。林丹子の妻は泣きながら相手の非道を難するが、相手は聞き分ける耳を持たない。そのとき、愚鈍であつたはずの槃特に突然の変化が訪れる。

父母のなげきにはんどくが。ぐどんのとびらやひらけ、んむつくとおきて。〔槃特〕「ヤイちよこちよこ切ッてはやかましい。此身を秤にかけてみて。入程取て跡をかやせ」とゐざりよつて。秤のさらに足をぐつとふみこんだり。〔ぐんばら〕「ヤア此はかりでをのれが身がかゝらふか。すねをひけ」とねめつくる。〔槃特〕「ムムかゝらぬはかりなせもつてうせた」と。ばたばたばたとけちらせば秤みちんにおれたりけり<sup>5)</sup>。

窮地にあたつてとつぜん槃特が豹変し、口調も乱暴に、「ええめんどくさい、この身をまるごと秤に掛けるから、いるだけ取つてあとと返せ」と言い、秤の皿に足を踏みこみ、最後は秤を蹴ちらかして「みちんに」壊してしまふ。これをきつかけに烏陀夷たちは「ぐんばら」どもを追い払うことができた。そして口々に槃特をほめる。

〔人々〕「ヲヲはんどくできたできた」。一生のちゑはじめ鳩の秤にかゝるちゑ。ためしなしたぐひなし申はかりはなツかりけり。ちゑとぐちとは秤のさほ。ちゑおもければ偽りありぐちおもければまよひ有。ちゑにすゝまづぐをすてず。正直しぜんは秤のおもりおもりりん。りんとかけてはりんもちがはぬ天の道。誠を以て身の宝扱こそ末世にたとへ草。はんどくがぐちももんじゆのちゑつゐに。らかなのくはをゑたり<sup>6)</sup>。

槃特はここに至つて「もんじゆのちゑ」を得、羅漢果を得たとこの章をしめくくる。

### 三、

第四章以下の紹介は省略する。

槃特が愚鈍の仏弟子として有名な周梨槃特を下敷きに行っていることはいうまでもない。そしてまた、この「釈迦如来誕生会」第三の後半に展開される「鳩の身代わりに自分の肉を割くことになり、肉を秤で計る」というエピソードが、仏教の本生譚のひとつである「シビ王本生譚」を下敷きに行っていることはあきらかである。

シビ王本生譚 *Sibi Jataka* は多くの仏典に登場する。とりあえず漢訳仏典でシビ王本生譚をまとめた分量の形で載せているものを挙げれば、『六度集経』巻一（薩波達の名で）、『衆経撰雜譬喻』巻上、『大莊嚴論経』巻十二、『賢愚経』巻一・梵天請法六事品、『菩薩本生鬘論』巻一、『大智度論』巻四等がある。漢訳経典以外では法顕『法顕伝』（宿呵多国、玄奘『大唐西域記』（烏仗那国）などの西域の記録にその旧跡が記され、『経律異相』のような仏典類書にも採録されている。

また仏典以外では古代インドの叙事詩として著名な『マハーバータ』 *Mahābhārata* に挿入され、また図像表現としてガンダーラ、マトゥラー、アマラーヴァティー、アジャンターなどのインド各地に残り、さらにキジルやクムトラなどの中央アジアの石窟、そして敦煌の壁画としても表現されている。わが国にも平安時代の仏教説話集『三宝絵』に収録されたのを嚆矢として、説話集における再話をさがせば『法華経直談鈔』、『金言類聚抄』、真名本『曾我物語』、『三国伝記』などにその例を見い出せる。ここでは便宜的に、『三宝絵』に収録されたヴァージョンの現代語訳という形でこの本生譚の概要を示したい<sup>7)</sup>。

昔、シビ王（戸毘王）という名の国王がいた。慈悲の心が深く、すべての生きとし生けるものを見ること、まるでわが子のごとくであった。天上の帝釈天はある日、シビ王の慈悲心を試そうと思って、毘首羯磨<sup>びしゅかつま</sup>天に次のように言った。

「あなたは鳩に変身して、逃げてシビ王の懐に入りなさい。私は鷹に姿を変えて鳩を追ひ、王の心を試みるから」。

こう言つて、おのおの姿を変えた。鳩は飛んで来て王の脇にもぐりこんだ。それを追つてきた鷹は王の前の樹にとまった。鷹は王に言った。

「私に鳩をお返し下さい」。乞われて、王は答えた。



「私は生きるものすべてを救おうという誓いを立てている。あなたに鳩を引き渡すことはできない」。

これを聞いて、鷹は次のように言った。

「私もその生き物の一員ではありませんか。どうして私には慈悲をかけず、逆に私の今日の食物を奪おうとなさるのですか」。

王は鳩の命も救いたいし、同時に鷹の飢えも満たしたいと考えた。そこで刀を取ってみずから自分の腿の肉を割き、鷹に与えようとした。そのとき、鷹が言った。

「与えてくださるなら、この鳩の重さと同じだけの量を下さい」。

王は天秤を用意して自分の肉を載せると、鳩はだんだん重くなり、一方、王の肉は軽くなるばかり。王は両足の腿の肉を切って載せるが、まだ釣り合わない。両腕、背中、そしてとうとう全身の肉をすべて切りとって秤に載せたのに、まだ鳩の方が重いのだ。そこで鷹が言った。

「あなたの肉はもうなくなってしまうたのに、まだ鳩の方が重いではないですか。あとはどこの肉を追加しようというのですか。そんなことはないで、早く鳩を返してください」。鷹がこう責めると、王は答えた。

「いや、どうしても返すわけにはいかない」。

こう言って、自分の身体全部をそのまま天秤に載せようとしたが、身体の筋が切れ、力尽きて、その場に転げ倒れた。王は自分の心を責めてこう思った。

「こんな苦しみは、地獄の無量の苦しみに比べれば、まったく大したことはない。私は今、仏法の智慧というものを少しはわかつている。それでもこんなに苦しんでいるのだから、ましてや地獄に堕ちた人で、仏法の智慧をまったくもっていない人は、その苦しみをどうすることができようか。私は自分から誓いを発して生きるものを救おうと思ったのだ。どうしてこれくらいの痛みに迷って、心弱くも秤から転げ落ちていられようか」。

そして「誰か来て私が秤に上るのを助けよ」と言い、起き上がった。手で天秤の緒にすがり、力をふりしぼって秤に登ったとき、王の心には何の迷いもなく、後悔の思いはなかった。その時である。大地は六種類に振動し、天上からは花が降り、大海に大波が起こり、枯れ木に花が咲いた。天人が現われ、王を讃めてこう言った。

「一羽の小さな鳥のためにすら、大事なわが身を惜しまないのは、真実の菩薩である。きつと近いうちに仏になるであろう」。

鳩は鷹に向ってこう言った。

「私たちは菩薩の身を傷つけるというあやまったことをしてしまった。早く天上の力をもちいて王の傷を癒さなければならぬ」。

すると鷹は、もとの帝釈天の姿に戻って、王に問うた。

「このおこないは痛く、苦しかったであろう。事を悔いる気持ちが心にあるか」。

王は答えた。

「深く喜ぶ心はあっても、悔いる気持ちはさらさらありません」。

帝釈はさらに問うた。

「そんなことを言っても、証拠があるわけではない。おまえのことは誰が信じるだろうか」。

すると王は誓って言った。

「今、深く仏道を求めんがためわが身を捨てたこのおこないが、心に偽りなく、またその結果が実りあるものであるならば、どうか、私の身体がすぐに元のようになりますように」。

(するとそのとおりになり、)帝釈天もまた天の薬を王に注いだ。王の身体にはたちまち肉が満ち、傷はすべて癒え、元通りになった。まわりの人はこれを見て、みな大いに喜び、王の姿を貴んだ。そしてシビ王はこの後ますます施しの心が広くなったのだった。

自分の命を惜しまない、これを「与えることの徳」(檀波羅蜜)の完成とするのである。昔のシビ王は、今の釈迦如来である。この話は『六度集経』『大智度論』等の經典に見えている。絵もある。

近松「釈迦如来誕生会」にあらわれる、槃特が鳩を殺した代わりに自分の肉を割くことになり、それを秤で計るというエピソードは、シビ王本生譚から発想されたものとして考えられない。鳩の代わりに同じ重さの肉を割くというモチーフ、秤が重要な舞台道具となること、切られる部位が股であることなど、共通点が多くある。ただし近松の作品におけるシビ王本生譚は「再話」というより、説話がいったんそれを構成する要素にまで分解され、その各要素を近松

が自在に用いて作品にみあった挿話を組み立てていると言ったほうがふさわしいだろう。説話の変容というより、説話の解体と再創造とみるべきである。

#### 四、

『三宝絵』におけるシビ王本生譚は、大乘仏教において菩薩に期待される実践徳目である「六波羅蜜」——布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧——の第一である「布施」波羅蜜（『檀波羅蜜』の典型話として置かれている。このことは『三宝絵』の撰者源為憲が典拠としたと記している『大智度論』にすでに示されていることであり、『四教義』などの中国天台の論書から比叡山までの伝統の中で既定とされていることでもあった。

ただし、シビ王本生譚は仏典の中でつねに布施波羅蜜の例話として語られるわけではない。中村史は『大莊嚴論経』『菩薩本生鬘論』『賢愚経』に収められたシビ王本生譚は、徹底した「求法」を行うべきことを説くときの例証話として語られていると述べ、『マハーバータ』を手掛かりに、シビ王本生譚は元来、「全ての生き物を守護せよ」という、ヒンドゥー教世界のクシャトリア、もしくは王の法、王の努めを説く説話であったことを推測している<sup>(8)</sup>。

近松の作にあつては、もとの説話が負っていた布施や求法といった宗教的倫理はあとかたもなく消え失せてしまっている。その一方で、説話を構成する要素としての「秤」という小道具が特権的に強調されていることは注目し値する。秤——ここに出てくるのは天秤ではなく、錘によって重さを計る形の秤のように読めるが——の大きさや鳩の重さ、肉の重さをめぐる具体的な数字が物語の原動力となっているし、結末部には「一生のちゑはじめ鳩の秤にかゝるちゑ。ためしなしたぐひなし申はかりはなツかりけり。ちゑとぐちとは秤のさほ。ちゑおもければ偽りあるぐちおもければまよひ有」云々と、秤をめぐる言語遊戯的な文さゝえあらわれる。

仮名本（十行古活字本）の『曾我物語』には、卷三の畠山重忠の科白の中で次のような箇所がある。

釈迦如来の昔、善恵仙人と申せし時、道をつくりたまふ中間に、燃燈仏を  
とをりたまふ。道あしくして、わづらいたまふ時に、仙人、泥の上にふし  
たまひて、御髪をしき、仏をとおしたてまつる。さつたい王子は、うへた

る虎に、身をあたへ、尸毘大王は、鳩のはかりに、身をかくる。これらみな、末代の衆生をおぼしめす、御慈悲の故ぞかし〔傍線筆者〕<sup>(9)</sup>。

「うへたる虎に、身をあたへ」——「鳩のはかりに、身をかくる」。口調のよい七五調の対句で薩埵太子とシビ王の本生譚の内容が語られている。寛永末から正保（二六四—一六四八）前半頃に刊行された仮名草子『夫婦宗論物語』の中には、法華宗を信じる妻が浄土宗を信じる夫を批判して言う科白に次のような表現がみえる。

「それ釈尊出世の始には、衆生仏をも知らず。自利の法も得難し。然るに仏種々に方便の説を述べ、自界他法の成就を催し、時節に応じて説給へば、以前の経は足代の如し。其外過去永劫より已後、娑婆八千度の間、種々の行、種々の法、有時は鳩の秤に肉を掛け、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽に命を代へ、衆生を済度し給ふ、三界の主を背、遠き西方極楽の阿弥陀を頼まんこそ、たゞ地獄の釜焦よ」と〔傍線筆者〕<sup>(10)</sup>。

ここでは本生譚は名指されないまま、シビ王と雪山童子の故事が並列され、前者は「鳩の秤に肉を掛け」という一句で表現されている。

また、一七一五年前後に初演された浄瑠璃『八百屋お七』の一節にもシビ王本生譚は次のような形で顔を出している。

……げに昔もためし有鳩の秤に身を代へし仏の慈悲の古も。愚僧が今も菩薩の行此酒則清浄池。吉三が垢さへ脱けるなら呑んで見せうと引受けて〔傍線筆者〕<sup>(11)</sup>。

今は三つの例しか挙げ得なかったが、中世から近世にかけて、シビ王本生譚はわが国の文学へ浸透する過程で、「鳩の秤」という簡潔かつ頭韻を踏んだ語句で表象されるようになっていったのではないだろうか。

ここでは詳しく述べないが、『三宝絵』以来、わが国の説話集等におけるシビ王本生譚の再話においては、シビ王が自らの肉を割き、ついに秤に載るに至るまでの自己犠牲行為の描写を省筆する傾向があった。よって「秤」そのもの

の存在感も薄くなる傾向があった。また、同時に、この本生譚がもとも有していた、王と鷹との問答のごとき、理詰めの「論弁的」な性格——それは、『マハーバーラタ』のヴァージョンにもっとも強く感じられる——も減じていく傾向にあった<sup>(12)</sup>。

先に引用した近松のテキストにある「一生のちはじめ鳩の秤にかゝるちゑ」という語句は、中世から近世にかけてシビ王本生譚がしだいに「鳩の秤」という簡潔で韻を踏んだ語句で表象されるようになってくる現象の一貫として理解される。近松は慣用句化しはじめた語句から、「秤」というモチーフを十分に生かした筋立てを創出した。またそのことは、シビ王本生譚が本来もっていた論弁性・対話性を復活させることにもなった。『三宝絵』ヴァージョンに見えるシビ王と鷹Ⅱ帝釈天とがかわす厳しい問答が、近松のテキストにあつては「ぐんばら」と烏陀夷のやりとりの形に移しかえられて再生していると言つてよい。それが劇文学というジャンルが要求した偶然の結果であるとしても、日本におけるシビ王本生譚の摂取のありさまを通観するとき、特記しておくべき事象として眼に映る。

説話の解体と再創造という視点からみると、「釈迦如来誕生会」でもっとも着目すべきことは、槃特が急に変貌して秤を粉みじんに踏み砕くというエピソードの結末部である。シビ王本生譚は本来、帝釈天が菩薩を試す物語であり、肉の尽きたみずからの体をまるごと秤に載せるまでシビ王は苦痛に耐え続けなければならなかった。しかし「釈迦如来誕生会」の槃特は肉を一片切り取られたあとは、決してそれ以上切り取らせようとはしない。急に智慧と勇氣に満ち、全身を秤に載せるから「入程取て跡をかやせ」と見得を切り、秤に載せた足で、この説話の表徴であった「鳩の秤」をこなごなに破壊する。そしてそれが作品全体の転回点となるのである。これこそ源泉となった本生譚との決定的な相違であり、近松の創造には一種の爽快感、カタルシスが感じられる。近松はもちろん作品展開の必然性にしたがってそのような創造を成し遂げたのだが、それは同時に、近松の意図を越えて、中世から近世へと仏教倫理が世俗化してゆく中で、異文化由来のひとつの仏教説話が解体されて元の形式も倫理も失いつつも、物語の中で新しい生命力を獲得する瞬間であったと言つてよいのではない。

## 五、

「釈迦如来誕生会」は物語の骨子として『釈迦八相物語』（作者未詳）を引き継いでいる。黒部通善が翻刻・紹介している寛文六（一六六六）年版の『釈迦八相物語』<sup>(13)</sup>には憍曇弥に見方する「馬將軍」、摩耶夫人の側につく「字將軍」、「うだい（優陀夷）夫婦」、また悉達太子の成道を妨げようとする提婆達多など、「釈迦如来誕生会」に登場する主要な人物が出そろっている。黒部善通によれば、『釈迦八相物語』は近世仏伝文学の嚆矢として、その後の仏伝文学の骨格を作りあげたものであり、日本にもたらされた仏伝が日本の風土のなかで変容を重ね、そのたどりついたところとしての意義もあわせもつという作品であった。江戸時代のロングセラーであり、仏伝を民衆に近づけるのに大いに貢献したという<sup>(14)</sup>。

ただし寛文六年版の『釈迦八相物語』と「釈迦如来誕生会」を読みくらべてみると、前者には烏陀夷の愚鈍の息子である槃特にあたる人物は登場せず、また「鳩の秤」に相当するエピソードも存在しない。本生譚がまったく取り上げられないわけではなく、海水を汲みつくして如意珠を得る大施太子本生譚が言及され<sup>(15)</sup>、「釈迦の本地」類の冒頭に現れる雪山童子本生譚も形を変えて作品にはめこまれていたのだが<sup>(16)</sup>、シビ王本生譚は利用されていない。おそらく槃特を養育する林丹子夫婦、そしてその家で起こる「鳩の秤」の場面は、近松「釈迦如来誕生会」における独自の発想であろう。

肉の重さをめぐる悪役との問答という点において、「釈迦如来誕生会」のエピソードは、シェイクスピア『ヴェニスの商人』の有名な人肉裁判の場面を思い起こさせる。伊藤正義は西欧中世のキリスト教説話集 *Gesta Romanorum* 中の第一五九話について、「等量の人肉」という観点から『ヴェニスの商人』との関係にふれ、シビ王本生譚についても言及している<sup>(17)</sup>。もしシビ王本生譚と『ヴェニスの商人』が一本の細い糸でつながるところがあるとすれば——ここからは小文の筆者にとって空想の領域になることはいうまでもない——仏教における本生譚の一つが、偶然にもユーラシア大陸を隔てた近世東西劇文学の巨匠によってその作品に組み込まれていることとなり、たいへん興味深い。

## 註

- (1) 近松全集刊行会『近松全集』第八巻（岩波書店、一九八八年）、五〇八頁。



- (2) 同右、五〇八―五一頁。
- (3) 同右、五八四―五八五頁。引用に際してはせりふ部分をカギカッコでくくり、せりふの発話者を「」で示した。また「くの字点」は用いずに表記した。以下、「釈迦如来誕生会」の引用はすべて同様とする。
- (4) 同右、五八六頁。
- (5) 同右、五九〇頁。
- (6) 同右、五九一頁。
- (7) 以下の現代語訳は、出雲路修校注『三宝絵』（平凡社東洋文庫、一九九〇年）九―一二頁、および馬淵和夫・小泉弘・今野達校注『三宝絵 注好選』（新古典文学大系三一、岩波書店、一九九七年）一〇―一四頁、を参照して筆者が作成したものである。上記二書の底本はいずれも東京国立博物館蔵 東寺観智院旧蔵本である。なお、「シビ王」を主人公とした本生譚には、ここで取り上げた「鷹に追われた鴿がシビ王のもとに逃げ込む」型のほかに、南伝『ジャータカ』等に伝わる「シビ王が盲目のバラモンに眼球を乞われる」型のものがあるが、後者については小文では扱わない。
- (8) 中村史『三宝絵本生譚の原型と展開』（汲古書院、二〇〇八年）の第二章「シビ王本生譚の原型と展開」。
- (9) 市古貞次・大島建彦校注『曾我物語』（古典文学大系八八、岩波書店、一九六六年）一五八頁。
- (10) 前田金五郎・森田武校注『假名草子集』（古典文学大系九〇、岩波書店、一九六五年）二二六頁。
- (11) 乙葉弘校注『浄瑠璃集』上（古典文学大系五一、岩波書店、一九六一年）八一頁。
- (12) シビ王本生譚の日本での撰取と変容に関しては、君野隆久「日本におけるシビ王本生譚」（『佛教文学』第二十一号、一九九七年）。小文はこの既発表論文の最終章の増補・補完を試みたものである。
- (13) 黒部通善『日本仏伝文学の研究』（和泉書院、一九八九年）四八三頁以降に翻刻されているものを参照した。
- (14) 同右、二九五頁。
- (15) 同右、五四六頁。「太施太子」となっている。
- (16) 第六の三に現れる（同右五七五―七頁）。『釈迦八相物語』では悉達太子が出

(17) 家後の修行として雪山に赴き、そこで三年間苦行したのち無常偈の前半を唱える鬼神に出会い、鬼神の食となる条件で後半二句を得る展開である。鬼神の正体が「びるしやな仏」であるところは「釈迦の本地」類冒頭の雪山童子本生譚と共通している。本来なら前生譚であるはずの雪山童子とのエピソードが、『釈迦八相物語』では太子出家後の行為として語られており、しかもそれが成道する直接の機縁となっている。本生譚を仏伝そのものに練りこむ形式は、はるか後の手塚治虫『ブッダ』と同様の趣向である。ただし黒部氏同右書によれば、悉達太子雪山修行説話自体は敦煌変文の仏伝類において一般的であった（第一章三節の3「仏伝変文と悉達太子雪山修行説話」参照）。伊藤正義『ゲスタ・ロマノールム』（篠崎書林、一九八八年）七八九頁。